冬学期・復興デザインスタジオ（建築）(B. 復興デザインコース コア科目）

伊豆大島の土砂災害復興のための提案

Redesign after the Land Slide Disaster in Izu-Oshima

担当教員：西出和彦、大月敏雄、窪田亜矢、本田利器、羽藤英二、松田雄二、井本佐保里
履修者：建築学専攻／種橋麻里、藤田悠樹、千野優斗、古賀智哉、曽新福、パチャ・ポンパギット、李斯奇、オウ・イヨウ、孫越、社会基盤学専攻／丸野幹人、安富佳菜子

Instructors: Prof. Nishide, Otsuki, Kubota, Honda, Hato, Matsuda, Assistant Prof. Imoto / Students: Mari Tanehashi, Yuki Fujita, Yuto Chino, Tomoya Koga, Tseng Hsin Fu, Patcha Pornpragit, Siqi Li, Wang Yiyang, Sunyue, Mikito Maruno, Kanako Yasutomi

土砂災害現場の視察（2015 年 10 月 24 日）

スタジオの主旨

本スタジオは、2013 年に伊豆大島で発災した土砂災害からの復興に対する提案を行うことを目的としたもので、計 11 名が履修した（2015 年 10 月 -2016 年 1 月）。担当教員に加え、東京都都市整備局の平野正秀氏、今田好敬氏にも現地との調整に協力いただいた他、伊豆鵜大島でホテル椿園を経営されていた清水勝子氏、大島町役場の職員の方々にも情報提供いただきながら提案を作成していった。最終成果は、2016 年 1 月 11 日に大島町役場にて発表を行い、現地住民の方と議論を行った。

最終成果発表会

「元町大火から学び、土砂災害の復興を考える」2016 年 1 月 11 日（月）13:00-17:00 @大島町役場

全体概要 : 大月敏雄

災害から 2 年以上が経過した今、立ち上がった行政の復興計画をもとに着々と事業が進められようとしています。土木工事を中心とした防災インフラの建設が先駆けとなり、メモリアル公園についての素案も示されてきています。しかしながら、周辺地域については民地であるという問題もあり、活発な議論がなされて

Objective of this studio

The objective of this studio is to make proposals for the restoration from sediment disaster that happened at Izu Oshima Island in 2013. This studio is held from October 2015 to January 2016, and eleven students enrolled in it. Proposals were created by many supports from contributors: Masahide Hirano and Yoshinori Imada, Tokyo Prefecture Office; Katsuko Shimizu, a owner of Hotel Tsubakien at Izu Oshima Island; and staff of Oshima Town Office as informants. The final proposals were presented at Oshima Town Office on January 11th, 2016, and a discussion was held with local residents.

Final proposal presentation

"Learn from Motomachi Big Fire and consider restoration from sediment disaster", 1pm to 5 pm, January 11th, 2016, at Oshima Town Office

Summary: Toshio Otsuki

Two years after the disaster, construction

エスキスの様子

ホテル椿園のおかみさんのレクチャー

いないという現状です。

本日は、演習スタジオとして、現地調査やリサーチを含めた半年間の成果を発表させていただきます。プロの都市計画コンサルタントに比べれば至らぬ点が多いかもしれませんが、「よそ者・わか者・ばか者」の視点からの提案は復興において重要となる可能性を秘めています。私たちは流域全体を対象とし、行政の計画を前提としながら種々の提案を付加させていきたいと考えています。

メモリアル公園と周辺地域への提案

被害が甚大であった神達地区に対して亡くなられた方への鎮魂や被害を受けた人々への祈りのために大島町によりメモリアル公園が計画されています。当エリアに対し、私たちは２つの提案をします。１つ目は、メモリアル公園を、土砂災害の恐ろしさを伝え、人々の営みがあった証を残すための「記憶の保存庫」というあり方を提案します。２つ目は、周辺地域の新しい将来像として、堆積工と火山博物館と連携した災害復興の軌跡を知る空間や大島の歴史的古民家と郷土資料館の移設による文化財的空間といった複合的な復興のあり方を提案します。

はじめにメモリアル公園のリデザインについてです。新たに整備される町道に接続する入り口から 300m 程度の参道を作り、最高部を追悼の空間とします。参道沿いの植樹については、下流には背の高い杉を生やし、上流に近づくにつれエゴノキなどの常緑広葉樹を混在させ、神聖な深い森へと雰囲気が変化するようにします。杉の植林については、つばき小学校など近隣の小学生を対象に植樹イベントを行い、学校に入学や卒業とともに植樹するといった文化を作ることで、メモリアル公園を自分たちで作り上げていくことも考えられます。記憶の保存の機能を担う住宅遺構については居住者の遺構を最大限尊重した上で、損壊の程度によって違ったデザインを施します。土砂を免れた住宅は椿で周囲を囲みプライバシーを保護することで住み続けるだけでなく、メモリアル公園の管理者事務室やボランティアやイベント活動の拠点としての機能も持たせることができます。基礎のみが残った住宅については周囲にオオシマザクラを植えながらも、そのまま遺構として保存します。これらの様々な住宅のあり方を見ることができるようになっています。参道の頂上には、被災した上流部に設置された献花台に花を手向け続けてきた人々の思いを引き継ぐために石碑と献花台を設置します。ここは、追悼式や災害記念事業を行う広場ともなります。

次に公園の周辺地域についてお話します。この地域は、元町からメモリアル公園を訪れる際の中継点であり、歴史的な新町亭や災害を経て残っているホテル椿園の新館がある重要なエリアです。将来的には災害を知らない子供たちや島外からの観光客が訪れることを想定して、大島の災害や文化について知る場所にするこ

of disaster preventive infrastructure, mainly civil engineering works, leads the restoration work, and draft of a memorial park have been presented. However, active discussions aren't ongoing at a time due to land ownership issue.

Today, as a studio, three proposals are presented based on half year long work, including on-site surveys and desk researches. These proposals have potentials to become important proposals for restoration as a perspective from "outsiders, young people, or idiots." The whole catchment area is set as our target, and, hopefully, our various proposals are added on the premise of current plan of municipalities.

Proposals on the memorial park and its surrounding area

This memorial park is proposed by Oshima Town, as repose of souls for deceased people and prayers for victims at Kandachi area, which was heavily damaged. We make two proposals at this area.

First, we would like to introduce redesign of the memorial park. Two features are added to the existing proposal of the memorial park: an approach to a mourning space at the upstream; and preservation of remains of houses to inherit memories. From the entrance connected to a newly constructed town road, an approach of about three hundred meters is constructed to the highest point, a mourning space. About planting rows of trees along the approach, tall cedars and evergreen trees with broad leaves are effectively mixed to create atmosphere of celestial deep forest. This process can be a method to construct the memorial park by our own hands. About remains of houses for preservation of memories, different designs will be applied depending on the degree of damage. Houses with no sediment damage should be used as a residence. Remaining foundations of houses are preserved as structural remains. At the top of the approach, a stone monument and flower donation tables will be placed in order to inherit sentiment of people who have donated flowers on flower donation tables at the damaged upstream area.

Next, we would like to mention the surrounding area of the park. We defined this area as a place to learn disasters and culture of Oshima. We propose an integrated management of the area as a historical and cultural facility, which will be established by relocation of the existing buildings in Oshima Island around Shinmachitei and the Annex of Tsubakien. Three buildings are specifically

現地最終成果発表（1 月 11 日）：メモリアルパーク班（写真左）、参道班（中）、住宅再建班（右）。

とを考えました。新町亭とホテル椿園の新館を中心に、大島に今ある建物を移設して歴史・文化施設として一体的に管理することを提案します。個別の建物について主に３つの建物を取り上げました。

①新町亭：メモリアル公園へ向かう途中にある新町亭は、三原山へ向かう茶屋とすることも考えられます。休憩所として立ち寄ってもらいながら、メモリアル公園を訪れる人々にも見てもらえるよう、町が経験してきた災害について知ることのできる資料を展示します。また、近隣にある明日葉研究所や大島の製塩工場と連携して大島の特産物を提供して食事処とすることも併せて提案します。

②ホテル椿園：災害を受けても残った建物の利用として、浴場は、展示スペースとします。客室については、生け花とかヨガのような教室としての利用だけでなく、外部学生や研究者のワークショップを行う場所にもできると考えています。

③移設を検討している建物：現在大島空港近くにある郷土資料課と古民家を移設して、大島の歴史について知ることが出来るようになる空間を提案したいと思います。周囲や新町亭と繋がる道には椿を植えて、大島の椿を感じつつ文化について知ってもらえたらと考えました。これらの建物を新町亭、ホテル椿園と一緒に歴史的、文化財として捉えて扱い、管理することを提案したいと思います。

最後に提案の全体像を示します。メモリアル公園を災害の記憶を無にしない記憶の保存庫として、メモリアル公園の周辺地域について新町亭を中心に大島の災害や歴史、文化について知ることが出来る空間として捉え直しました。復興していく姿の一つの可能性として想像していただければ幸いです。

「メモリアル公園と元町中心部を繋ぐ大金沢沿川の参道空間としての提案」

私たちの対象地域は海からメモリアル公園に至るまでの大金沢沿川です。沿川道路に対しては「参道」という新しい考え方を加えることで、単なる河川インフラから追悼の意味合いを加えた歩道に変容させます。そして、元町南部の新しい道路をさらに盛り上げるために、図書館等の公共施設の導入によって島全体の人々が集まる場を生み出します。

私たちはこの大金沢沿川道路に求められる役割を元町中心部と山側地区を歩いて繋ぐ役割だと捉え直しました。山側地区には、記憶の保存庫であるメモリアル公園・最も被害が甚大であった神達地区・噴火や土砂災害をもたらしながらも島の象徴である三原山があります。また、沿川地域も土砂の溢流によって被害があった地域であることを忘れてはいけません。そこで、被災された方や山に対する畏怖を踏まえて、通過するだけの単なる道路にするのではなく、改まった気持ちで歩く＝「参道性」というものを付加した歩道として提案します。このとき、海から山に向

mentioned in this proposal:

1) Shinmachitei – Shinmachitei, on the way to the memorial park, can be regarded as a rest house on the way to Mt. Mihara. Artifacts will be exhibited to hand down this town's experience about disasters, while being used as a rest space and a space that visitors of the memorial park can find. We would like to propose that a restaurant to serve local specialties should be also established, in collaboration with nearby facilities.

2) Hotel Tsubakien – To utilize damaged, but remaining, building after the disaster, artifacts such as some pictures should be exhibited, as a exhibition space of Oshima's history. Guest rooms can be used as a space for workshops, well as cultural activity of town residents. Shinmachitei and Hotel Tsubakien can hold exhibition of the same theme, or this place can be a temporary store of specialties and camellia oil.

3) Buildings to be relocated – The local museum near Oshima Airport and traditional houses should be relocated to create a space for learning history of Oshima Island. Visitors can learn its history as well as experiencing camellia trees of Oshima Island on the way to this integrated historical and cultural asset. It must be meaningful to preserve it through mutual support.

We hope that you can imagine this proposal as a potential image of restoration.

A proposal on Ookanazawa stream as a mourning space, connecting the memorial park and the center of Motomachi

Our proposal site is an area along Ookanazawa stream, from the ocean to the memorial park. First, we would like to introduce a plan of municipalities for the targeted area along Ookanazawa stream. This area is included in a major project of Motomachi area, and town roads on the both sides of the stream will be built and expected to function as community road network. However, the current plan is still a conceptual design made from the downstream. We would like to propose detailed plans of this area.

We redefined the role of these roads along Ookanazawa stream as a walkable connection between the center of Motomachi and mountainside areas. These mountainside areas include: the memorial park, a storage of memories; Kandachi area, the most severely damaged area; and Mt. Mihara, a symbol of this island that also causes eruptions and sediment disasters. Based on awe toward victims and mountains, these roads are pro-

けて島特有の地形である坂を上り詰めていくにつれて、道路の幅や賑わいの度合いがスケールダウンすることにより、より一層山側に近づくという実感が得られるようにします。参道性というものを考えるために、元町中心にある吉谷神社を参考にしました。この吉谷神社は 1965 年の元町大火の復興計画として早稲田大学の吉阪研究室が提案したものです。単なる神社の参道としてだけでなく、海岸遊歩道や山手通りを結ぶ役割がありました。現地調査を通じて、参道の特徴として神社周辺の緑の連続性や道路の舗装があると感じました。これらの厳かな雰囲気を生み出すサインを沿川道路に散りばめることにより、災害があったからこその道路空間が完成すると考えます。

一方で、この新設町道は元町南部に新たな軸線が生み出すという可能性を有しています。山に向けて静かな空間へと移り変わりながらも、人の集まる拠点を生み出すためには、エリアに応じた適切な設計が求められます。私たちは地域の読み解きを踏まえてゾーニングを考えました。特に大島一周道路と大金沢沿川道路とが交差点については人々が訪れやすい場所になります。この点を含んだ大金沢右岸は新開発エリアとして公共施設を中心に人々が集まる場となります。一方、車道が通る右岸側は住宅再建エリアとして良好な環境が出来ることで沿道に住宅再建が進みます。ここで新開発エリアに導入する公共施設は図書館兼公民館の複合施設です。老朽化した島で唯一の図書館の移転と島が長らく失っていた公民館の新設を合わせることで両者の機能を補います。元町以外の地区からも訪れる子供たちを考え、図書館としては最もアクセスの良い立地が求められます。また、大島には自治会がないとことから、地域の簡単な集まりや催しものをするときに利用できる公民館が求められます。これら二つの機能が同じ施設に含まれることによって、子供たちから大人まで大島の人々が集う場所になります。また、施設のすぐ近くには河川に沿って町民交流広場を設けます。天気の良い日は施設と広場を行き来することができます。元町中心部から徒歩圏内にはオープンスペースというものがなかったことから、子供たちの帰り道の遊び場、散歩する高齢者の休憩所といった使い道となるだけではなく、もしもの際には土砂の緩衝地帯となることから防災性の向上といった役割も有しています。

最後に私たちの班の提案をまとめます。行政計画の大金沢沿川道路に基づきながら、新たに「参道性」というものを付加することで、元町中心部からメモリアル公園（三原山）に向かって改まった気持ちで歩き、被災の記憶を風化させない歩道としての整備を提案しました。また、参道の起点となるエリアには老朽化した図書館の移設や公民館を導入することで新たな拠点を創出します。被災者や直接の被害はなくとも心を痛めた多くの町民にとって落ち着ける場所となることを期待しています。

「大金沢下流域を中心とした復興生活再建提案」

私たちは復興における生活再建を軸に暮らしの多様なニーズに沿った住宅を提案します。 災害後の伊豆大島の居住生活については、復興において解決しなければならない問題がいくつか考えられます。まず、土砂の被害を受けた住宅の住人への住宅供給や、今後の住宅タイプについてあまり考慮されていないこと。次に、Ｉターン・Ｕターン者のような新規来島者にとって賃貸物件のストックが不足しており、居場所が少ないと

posed as pedestrian roads with “character of an approach” that we should walk in a ceremonious mind. As we walk up slopes, unique landscape of this island, from the ocean to mountains, width of the roads and amount of activity will decline, and it gives us actual feeling of getting closer to mountains. As a reference of “character of an approach”, we’ve visited Yoshiya shrine at the center of Motomachi, designed as a restoration plan for Motomachi Big Fire in 1965. Through on-site survey, we’ve experienced continuity of greenery around the shrine and pavement of the roads, as characteristics of the approach. By spreading these signs around the riverside roads to establish solemn atmosphere, we expect that the roads will be completed as a space that can exist only after the disaster.

On the other hand, this newly built town roads have a potential to create a new axis. We’ve considered this zoning based on characteristics of each area. An intersection of the Oshima Loop and the road along Ookanazawa will become a place that people can easily visit. Including this point, the right bank of Ookanazawa will become a place that people gathers as a newly developed area around public facilities. On contrary, the left bank side with a car street will be restored as a residential area through creating desirable environment for dwelling. The public facility in the newly developed area is a building complex of a library and a public center. These functions complement each other by relocating the only deteriorated library in the island and establishing a public center that this island hasn’t had for a long time. Considering children coming from outside of Motomach area, the most accessible place should be offered for the library. As Oshima Island doesn’t have a neighborhood council, a public center is required that can be used for some local gatherings or events. By having two functions in the same facility, it will turn out to be a place that any people in Oshima Island gathers, from the young to the old. Additionally, near the facility, a square will be placed for town residents to gather. This square can have multiple functions as the only open space near the center of Motomachi, including a buffer space for sediment to improve resilience against disasters.

We hope that these places will be a relaxing place for victims of the disaster, and also for the other town residents, who may not have had any direct damage, but are still in a grief.

Proposal on regeneration of lifestyle around the Ookanazawa downstream area

We propose houses to meet various needs of living, in terms of regeneration of lifestyle. About lifestyle of Izu Oshima Island after the disaster, several issues arise for restoration. Firstly, there is not enough consideration for provision of houses for residents of the houses damaged by sediment or for types of houses to be prepared. Secondly, there is not enough rental house stock for new residents of this island, as well as their place to belong. Lastly, stores or commercial activities haven’t been restored from damages of the sediment disas-

現地最終成果発表後の住民の方との質疑応答。

全提案を統合した模型。

いうこと。土砂災害で被害を受けた商店、商業が復旧できないこと等が挙げられます。

このような問題に対して、復興計画の中で今後変化が顕著で地域の活力を担うであろう大金沢下流沿いに対して、住宅や商業、浜の被災した場所の機能再建と、ＩＵターン者の住宅などを配慮することによって、大島に以前から住んでいる人と新しく移り住む人のための場所作りを同時に考える必要があります。これらの両者のニーズを満たすための新しい住宅の受け皿として３つの住宅プランを提案します。

①自立再建型：全壊住宅あるいは災害後取り壊された住宅に関して、自立再建を望む方へ戸建てのモデルプランの提案を行います。住戸はabの二つに分かれており、共用テラスによってつながっています。二つの住戸に分かれる分棟型ということですので、母屋である住戸aに被災した方が住み、住戸bについてはライフスタイルの変化に応じて自由に使うことが出来ます。例えば貸家として、高校生（インターン）、I・Uターン者、ボランティアなどの一時滞在者に対して柔軟に貸し出すこともできます。

②代替住宅：公的集合住宅として、復興公営住宅で入居要件に合わない人々を対象とします。復興公営住宅は山側に建設されているため、元町中心部へのアクセスが良く元の住居に近いことが利点となります。敷地は大金沢沿川道路と一周道路の交差点に設定します。平面の計画としては自立再建型と同様に大小２室の１ユニットを基本設計とします。例えば、被災された方の中には、もともと商店を営んでおあり、災害によって職場と住宅の両方を失ってしまってしまった人もおられるかもしれません。個人事務所や個人商店を道路に面したユニットに入れることにより、住宅と商業の再建を同時に行うことが可能となります。

③移住促進住宅：被災した方で、集合住宅以外の選択肢を望む人や、商店を営んでいたものの被災し、再開したいという人へ提案する公的賃貸住宅です。敷地としては川の河口でもあり浜辺に面した場所を設定します。住宅形式で、一階の一部を店舗にすることにより、集会所や貸しスペース、貸店舗、チャレンジショップなど多目的に利用できます。島の住民の船の停留所が近くにあることから、利用者の憩いの場にもなります。商業や地域交流を提供するだけでなく、サーフィンや釣りといったレジャーや観光を目的とした来島者のニーズにも応えます。これらの住宅がより来島者にとって魅力的に映るように、土砂の被害を受けた弘法浜沿いでは海の家などを再建します。

被災からの復興と、新しい来島者への対応を同時に考えることで、将来を見据えた島の持続的発展につながる提案になると考えます。

議論（質疑応答）

質問：メモリアル公園は大島の人たちにとって日常的に使う場にはなら

ter.

Against these issues, two types of places should be prepared at the same time: places for existing residents; and places for new residents from outside. As new types of houses to meet both needs, we will propose three residential plans.

1) Self-construction type - For self-construction of fully demolished houses or demolished houses after the disaster, we propose a model plan of detached houses. We selected a plot at the north side of Motomachi Bridge. As most houses of the area was fully demolished, or half-demolished, by piled sediment, we consider reconstruction at the same location as far as it's possible. The house was divided into Part A and Part B, which are connected by common terrace. As the house was separated into two parts, the original residents live in the main part, Part A, and they can use Part B in a flexible manner, depending on change of their lifestyle.

2) Alternative house type - This public apartment complex is targeted for people who don't meet requirements of public housings for restoration. Some benefits of these houses are good access to the center of Motomachi and proximity to their original residences. Its plot is selected at the intersection of the Loop street and the road along the Ookanazawa stream. Its floor plan employs a unit system of two rooms as well as the self-construction type. Former store owners can accomplish restoration of residence and commercial activity at the same time.

3) Relocation promotion house type - This is a public rental housing for those who hopes to live in houses other than apartment complexes instead of their house damaged by the disaster, and for those who wants to restart their store which was damaged by the disaster. A plot is chosen from a location that faces seashore and estuary. The building is in a style of residence, and a part of the ground floor can be used as a shop space that can be used for multiple purposes. That space can be used as a rest space for boat users. Not only offering commercial opportunity and community activity, it will meet needs of visitors who come to this island for leisure or sightseeing, such as surfing and fishing. To make these houses more attractive for visitors, damaged tourist attractions of Kobohama beach such as beach huts should be restored. Program and event can be held for interaction between visitors and local residents, that promotes tradition and attraction of the island for tourists, or that introduces local lifestyle for new residents from outside of the island or

発表後、場所を変えて住民の方と自由に議論。

ないかもしれません。その意味で町民だけではなく観光客に対しても配慮しなければならないでしょう。また、観光については雨の日対策ということが重要になるでしょう。大島に訪れた観光客は雨が降った時にできるレクリエーションは少ないという問題があります。これらは本来島民が考えるべきことなのかもしれないが、なかなか良いアイディアを見つけられないでいます。その意味で外からの意見は島民に刺激を与えており、大変感謝しています。

大月：メモリアル公園が建設から数十年経過した後にも持続的に運営できるように、この提案は大げさに言えば「何も手をつけない」というものです。芝生のような手入れが必要なものは極力用いないように、島民への負担を軽くすること最大限配慮して考えています。例えば、神達地区の被災住宅についてはそのまま残っているもの、基礎だけ残っているもの、基礎ごとながされたものの3タイプがありますが、そのまま残っているものは管理用施設として利用し、基礎だけ残っているものはそのまま残すということを考えています。これらの維持管理は比較的容易になるでしょう。メモリアル公園に求められるのは、現在ある２つの献花台の精神を残すことだと思っています。それらは多額の費用をかけて作られるものではなく、住民の手でペンキを塗るなどの修理ができるものであるべきでしょう。また、このとき周囲の植栽も鍵になります。今から50年後の様子をどうなっているかを想像して植樹の選定をする必要があるのではないでしょうか。近隣の小学校と連携して、例えば小学校１年生の時に苗木を植え、卒業と同時に成長した木をメモリアル公園に移すというような取り組みもあり得ます。このようなものが本当の意味でのメモリアルになるのではないでしょうか。

雨の日の対策については大島の観光において重要な課題だと思います。大島の伝統的な民家では、椿の枝から縄を伝ってきた雨水を窯に集めていたというような古い文化がありますが、同じ雨を見る場合でも、大島の水にまつわる問題と解決法を知っているのといないのでは全く違った体験になるのではないでしょうか。こういった歴史を学ぶ場をつくることもひとつの解決策かもしれません。その他、雨の日ワーキングのようなものを作り、我々のような島外の学生と一緒になってアイディアを出すことそのものが大事なプロセスかもしれません。

（文：履修生、編集：丸野幹人）

those returned to this island.

By considering together both restoration from the disease and response to new comers to this island, this proposal leads to a sustainable development of this island for its future.

Discussion

Q: The memorial park may not become a place of daily use for residents of this island. In that way, we should consider tourists as well as local residents. Also, for tourism, it is important to find a measure for rainy days. It is an existing problem that local residents couldn't come up with good ideas so far. In that way, I appreciate your proposals, as opinions from outside of island stimulate residents of this island.

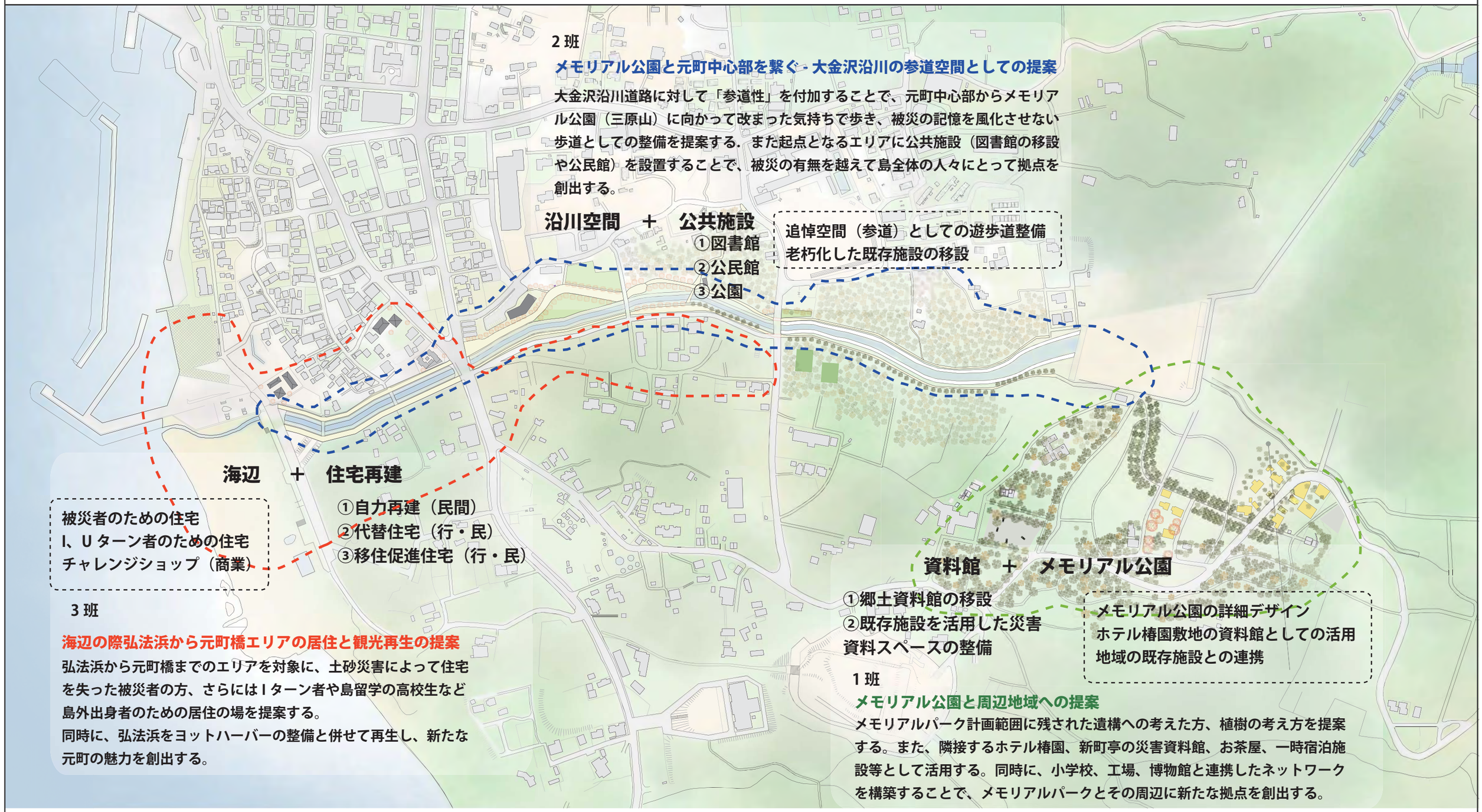
Otsuki - To operate the memorial park in a sustainable way even after several decades, these proposals should be rather understood that "no operation is needed there". Reduction of burden of local residents is prioritized to the maximum. All required for the memorial park is to sustain spirits of the two existing flower donation tables. That should be what can be repaired easily by local residents, such as repainting it by them. Surrounding plants will be the key. Plants should be selected by imagining what happens in 50 years. As collaboration with nearby elementary schools, for example, pupils can plant trees at the first grade, and replant the grown-up trees at the memorial park when they graduate. Such activity could be a true memorial.

Measures for rainy days are an important issue for tourism of Oshima Island. It should be avoided as much as possible, that tourist who came for fishing cannot do anything because of stormy weather. We have several ideas already. For example, at traditional houses of Oshima Island, people collected water in a pot through ropes connected to camellia branches. The experience of the same rainfall will be different, if we know specific problems and solutions of Oshima Island. It is required to create a place to learn such history. It can be effective to create a working group on measures for rainy days, and discover ideas with students outside of the island, like us.

東京大学大学院工学系研究科 2015 年度 復興デザインスタジオ（建築）
「伊豆大島の土砂災害復興のための提案」

伊豆大島の土砂災害復興のための提案　全体図

2015 年度 復興デザインスタジオ（建築）履修生
オウ イヨウ , 古賀 智哉 , 曽 新福 , 孫 越 , 種橋 麻里 , 千野 優斗 , パチャ ポンパギット ,
藤田 悠樹 ,　丸野 幹人 , 安富 佳菜子 , 李 斯奇
担当教員
大月敏雄（建築）, 西出和彦（建築）, 井本佐保里（建築）, 松田雄二（建築）, 窪田亜矢（都市）,
本田利器（新領域）, 羽藤英二（社基）, TA: 矢吹慎



東京大学大学院工学系研究科 2015 年度 復興デザインスタジオ（建築）
「伊豆大島の土砂災害復興のための提案」

メモリアル公園とその周辺地域への提案

1 班　李 斯奇（建築学専攻博士 1 年）, 王 羿陽（建築学専攻修士 1 年）, 古賀 智哉（建築学専攻修士 1 年）, 安富 佳菜子（社会基盤学学部 3 年）

1．提案主旨

今回の土砂災害により特に被害の大きかった上流部に対して、亡くなられた方への鎮魂、そして被害を受けた全ての方への祈りのためのメモリアル公園が計画されています。私たちはメモリアル公園を鎮魂のための空間であるとともに、歴史的に御神火様と呼び神格化してきた三原山のもたらした今回の土砂災害の恐ろしさを伝える場として、そして当エリアに人々の営みがあった証として”記憶の保存庫”というあり方を提案します。さらに、ホテル椿園とその関連建物が広がっていた周辺地域に対して、大島に住む地元の方に加え三原山とメモリアル公園を訪れる人々のために復興の軌跡と大島の歴史を知る空間を提案します。

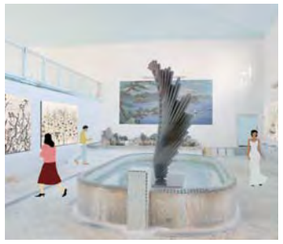
2．提案のコンセプト

1）メモリアルのあり方を再考し、ランドスケープと維持管理まで考慮した空間を提案すること
2）参道における休憩地や学習の空間という機能を担う可能性を提案すること
3）災害後も残った環境を活用し、新たな構造物の建設を最小限に抑えたデザインを提案すること

ホテル椿園新館の屋上からメモリアル公園と新町亭を望む

椿林と古民家

新町亭の茶屋の入口



ホテル椿園の新館ギャラリー

3．提案の全体像

全体配置図

両側に背の高い杉を植えた道で、メモリアル公園の中を御神火様に向かって歩きます。元町から続く参道の舗装が続いています。

メモリアル公園の参道

住民の意向を最大限尊重しながら、住宅基礎を取り壊さずに残すデザインの可能性を提案します。人々の営みがあった証を次世代に伝承するハードウェアとなる。

住宅遺構イメージ

参道を一番上まで上った先にささやかな広場があります。現在ある献花台の追悼の気持ちを引き継いで慰霊碑と献花台を設置し、災害の式典などを行う場とします。

参道頂上の献花台と石碑

東京大学大学院工学系研究科 2015 年度 復興デザインスタジオ（建築）
「伊豆大島の土砂災害復興のための提案」

メモリアル公園と元町中心部を繋ぐ　大金沢沿川の参道空間としての提案

（2 班）　曾 新福（建築学専攻修士 1 年）, 千野 優斗（建築学専攻修士 1 年）, Patcha Pornpragit（建築学専攻修士 1 年）, 丸野 幹人（社会基盤学専攻修士 1 年）

1．提案主旨

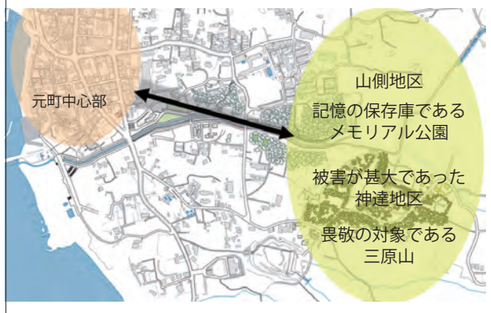
大金沢沿川道路に対して「参道性」を付加することで，元町中心部からメモリアル公園（三原山）に向かって改まった気持ちで歩き，被災の記憶を風化させない歩道としての整備を提案する．また，起点となるエリアには図書館の移設や公民館を導入することで，被災の有無を越えて島全体の人々にとって拠点となることを期待する．

2．提案のコンセプト

1）新設町道に「参道性」を付加することで，特に被災者へ配慮した歩道として整備する
1-1　山側の静かな空間へと近づくにつれてスケールダウンすることにより，町と山の間の各エリアを連続的につなげる
1-2　表参道や歩道橋等のスポットでは海と山への視線を意識することで良好な眺望を確保する

2）公共施設の導入により参道の起点となるエリアに新たな拠点を生み出す
2-1 図書館と公民館を一体化してお互いの機能を相互に高めることで，島全体から老若男女が訪れることができるスポットを創出する
2-1 大金沢に沿って防災性に配慮した町民交流広場を作ることで，安心できる空間を整備する。

1）　新設町道のあり方と参道性



沿川道路は元町中心部と山側地区を「つなぐ」

吉阪隆正のスケッチ
海岸遊歩道と山手通りを結ぶ役割

1. 道路の舗装

2. 緑の連続と起点

吉谷神社の参道（元町大火復興計画の一つ）のリサーチ

2）　新設町道の人を集めるポテンシャル

・新開発エリア
公共施設を中心に人々が集う場
公民館 / 図書館 / 食堂
広場 / 商店

・住宅エリア
町道沿いに住宅再建
戸建て再建 / 集合住宅

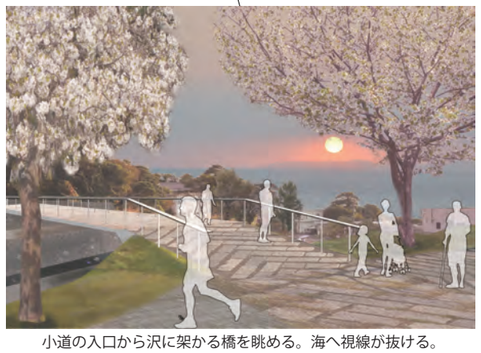
・保留エリア
被災地形や林を自然に回復
農地 / 献花台 / 茶屋

～沿川道路周辺のエリア分け～　下流ほど日常でよく使うエリア、上流ほど静かな追悼のエリアとなる

3．提案の全体像

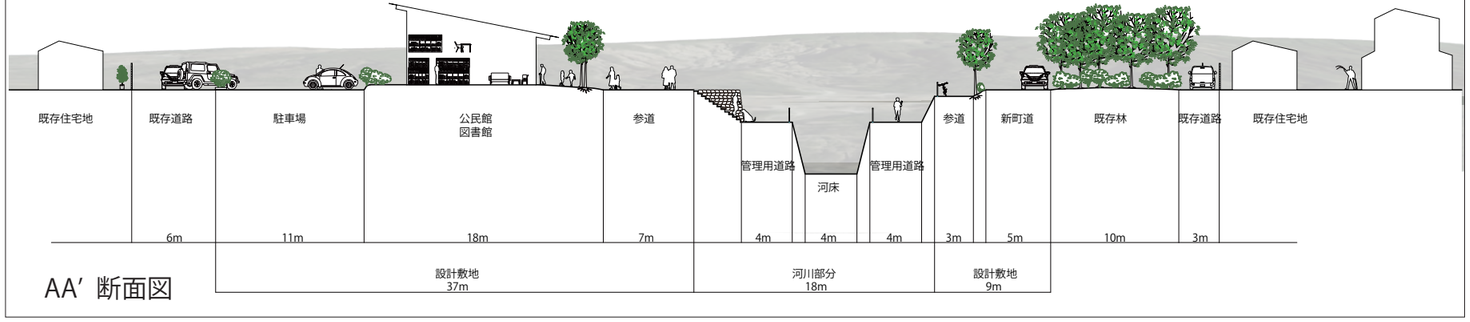
平面配置図

広場の間の参道から山を眺める。日常的に人がいる空間となる。



小道の入口から沢に架かる橋を眺める。海へ視線が抜ける。

上流の参道から山を眺める。道幅は狭まり木はうっそうとする。



AA’ 断面図

東京大学大学院工学系研究科 2015 年度 復興デザインスタジオ（建築）
「伊豆大島の土砂災害復興のための提案」

住宅再建に関する提案

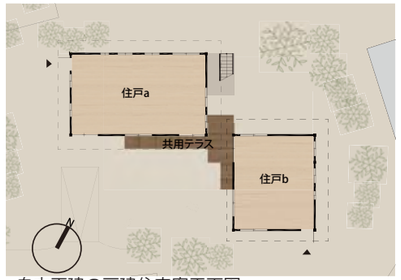
3班　種橋 麻里（建築学専攻修士１年）, 藤田 悠樹（建築学専攻修士１年）, 孫 越（建築学専攻修士２年）

1．提案主旨

３班は、大金沢流路の下流沿線における罹災者の住宅再建に対してプロポーザルを行います。現在は岡田、家の上において復興公営住宅が計画されていますが、現在仮設住宅に入居している 37 世帯のうち、復興公営住宅への入居希望は 21 世帯にとどまっています。被災された方々にとって迅速な住宅再建と安全安心が担保された生活の復興は急務でありますが、年月によるライフスタイルや世帯構成の変化、また若年層の流出と高齢化が進展する中で UI ターン者等、島外からの活力を受け入れる土壌としても住宅ストックの柔軟さは必要とされています。そこで本提案では土砂災害により住宅再建を余儀なくされている方々、うち復興公営住宅以外の選択肢を希望されている方々に対し３つの住宅プランをモデルとして提案します。これらの住宅が個々のニーズや生活の変化に応じて多目的に利用できる柔軟さを合わせ持つことで、商店や事業所といった生業の再建に付属して、UI ターン者や観光業など島外の活力の受け皿となる賃貸・住宅ストックを計画します。

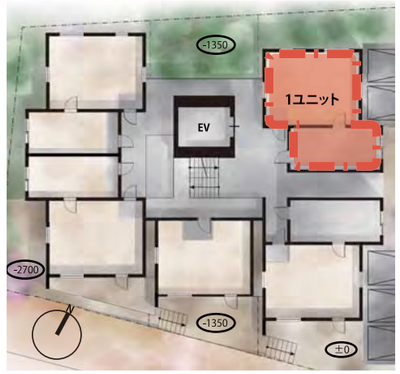
2．提案のコンセプト

1）多様な再建ニーズに対して復興公営以外の選択肢となる住戸のモデルプランを掲示する。
2）被災世帯の住宅に生活再建を後押しする＋αの機能を付与する。
3）商業等の生業の復興に加え、来島者の受け皿となる空間をつくる。



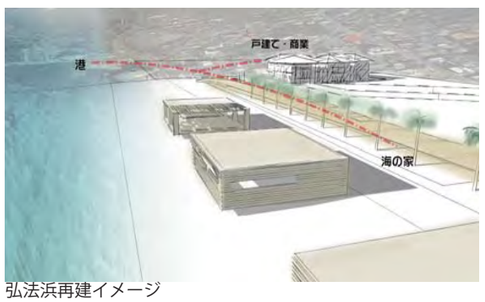
a:自立再建の戸建住宅案平面図

b:代替住宅外観



b:代替住宅平面図

c:移住促進住宅外観



弘法浜再建イメージ

a：自立再建
全壊、または取り壊しとなった住居の住人で、元あった場所で自立再建をしようとする被災者のための住宅プランの提案。ライフスタイルの変化に適応する。被災世帯のみならずUIターン者など新規来島者の住居となるなど多様な可能性を持つ。

b：代替住宅
自力再建が困難かつ、復興公営住宅の入居要件や被災地近隣での居住、また住居とともに商業・生業の復興を望む被災世帯を対象とした公的住宅。大小２部屋１ユニットの間取により柔軟で、個々のニーズ応じた居住空間を創出。

c：弘法浜再建と移住促進住宅
自力再建が困難かつ、集合住宅での生活よりも戸建てのプランを希望する被災者に対する公的賃貸住宅。被災世帯のみならず UI ターン者等の賃貸ストックも付随する。集会室や貸しスペース、行楽期は弘法浜の観光資源の来訪者に対する店舗として利用可能な多目的スペースは地域と来島者をつなぐ接点となる。